

2026年度

《第1回 iP class【東大専科】2科選抜入試》

国語

時間50分、100点満点

受験上の注意

1. 解答用紙には、受験番号・氏名を記入してください。
2. 解答は、解答用紙の所定のところに記入してください。
記入方法を誤ると得点になりません。
3. 試験終了の合図とともに、解答用紙・問題用紙とも回収します。

郁文館中学校

問一 次の傍線部のカタカナは漢字で書き、漢字はその読み方をひらがなで書きなさい。

- ① 不明な点はセンモン家の意見を参考にする。
- ② 日々キケンな目に遭わないように注意する。
- ③ 雨の日は親に駄までのソウゲイを依頼する。
- ④ 日ごろからゴミをヒロう習慣を身につける。
- ⑤ 雲の多い怪しげな空模様にイワ感を覚えた。
- ⑥ 彼の一言でクラスの雰囲気が一気に和んだ。
- ⑦ 朝晩の寒暖差により悪寒がし、早めに寝た。
- ⑧ 家で問題が起きるのは、日常茶飯事である。
- ⑨ 風情とは、日本古来存在する美意識である。
- ⑩ 努力に努力を重ねた結果、願いが成就した。

問二 次の各文の空欄A～Eにあてはまる適切なものを選び、記号で答えなさい。

- ① 絶（A）絶命のピンチを乗り越えた。
ア 体 イ 対 ウ 好 エ 滅
- ② 大好きなゲームの話で意気（B）合する。
ア 当 イ 等 ウ 投 エ 頭
- ③ 根も（C）もないうわさが仲間に広まる。
ア 葉 イ 歯 ウ 花 エ 土
- ④ 第三者が利益を得ることを漁（D）の利という。
ア 師 イ 船 ウ 場 エ 夫
- ⑤ 耳にかけた鉛筆を探すなんて（E）台下暗しだ。
ア 東 イ 島 ウ 答 エ 灯

□ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

僕は二〇一七年に出版した『中動態の世界―意志と責任の考古学』という本のなかで、古代のインドヨーロッパ語に存在した中動態の概念について考察しました。この本は文法について詳しく論じているので一種の言語論であるわけですが、同時に、人間主体のあり方をとらえなおす試みでもありました。

僕が①中動態の概念に関心を持ったのは大学生のころですが、それは自分が(注1)ポストモダンと呼ばれる思想に強く惹かれていたことと関係しています。ポストモダン思想においては、近代的な主体性が批判されていました。それは一言でいえば、主体の能動性を疑うことであつたと思います。だからポストモダン思想では受動性がしばしば強調されました。

しかし僕には受動性を強調するだけではだめだという直感がありました。なぜならばそれは能動と受動というありふれた対立のなかで力点を移動しただけであるからです。受動性を強調しているだけでは、どうしたつていつか、「能動性も大切だ」という話に戻ってしまいます。つまり能動と受動の対立そのものから脱却しなければならぬ。それはまさしくポストモダン思想のなかでしばしば語られていた脱構築の発想です。

そういう漠然とした直感を持つていたときに、中動態なるものの存在を知つたのです。しかもそれは古代の言語に存在していたものだということでした。もし中動態が能動と受動の対立の外にあるものだとしたら、それはポストモダン思想にピタリとくる概念です。おもしろいのはそれが新しいものではなくて、古いものだったということです。

ポストモダン思想は近代(モダン)によって覆い隠されてしまった古い概念を再発見する営みとしての側面を持つていたと思います。たとえば「(注2)間テクスト性」とか②「作者の死」といった考えは、ある意味では古代ギリシア的です。古代ギリシアでは作者が事物を創造するなどとは考えないからです。たとえば詩人はムーサという神から言葉を受け取るのであつて、詩人が詩をつくつていくわけではないと考えられていました。

(中略)

能動態と受動態の対立というのは一言でいえば「する」と「される」の対立です。行為の矢印が自分から他に向かえば能動だし、その矢印が自分に向いていけば受動となります。では③能動態と中動態の対立はいかなるものであつたか。参考になるのは、フランスの言語学者、エミール・バンヴェニストの定義です。

能動では、動詞は主語から出発して、主語の外で完遂する過程を指し示している。これに対立する態である中動では、動詞は主語がその座となるような過程を表している。つまり、主語は過程の内部にある。

(『一般言語学の諸問題』、訳文には手を加えてある。以下、同様)
動詞の名指す過程が自分の外側で完結する場合には能動態が、それが自分の内側にとどまる場合、主語が過程の「座」――「場」と言い換えてよいでしょう――となつている場合は中動態が使われるということです。つまり、能動態と受動態の対立が「する」と「される」の対立だとすると、能動態と中動態の対立は外と内の対立といえます。

たとえば、「与える」は能動態です。自分の外側で与えるという行為が終わるからです。それに対し、「欲する」は中動態です。ギリシア語ではこれを「βούλωμαι (ブローマイ)」といいます。現代の英語に訳すと「I want」となり、これは能動態であるわけですが、よく考えてみると、それが中動態で表現されていたことの理由が分かるはずで、「水が欲しい」とき、私は実際には少しも能動的ではありません。私のなかで水への欲求が高まつていて、私はそれに突き動かされており、むしろ受動的とすら言えます。水を欲するという過程が私を場として起こっている。

そう考えると、「欲する」を能動態によつてしか表現できないことのほうが不正確な感じがします。能動態はもともと「欲する」という現象にあつた受動性をかき消して、あたかも能動的・主体的に何かを求めているかのような意味をつくり出してしまふからです。ここに僕が中動態の概念を通じて批判的に検討した概念が関わってきます。それが「意志」です。

能動態と中動態の対立から能動態と受動態の対立への移行が、どのような意味を持っていたのかを考えるために、「*be seen* (ファイノ)」という動詞を紹介しょうかいします。

能動態に活用していて、「I show」つまり「私が(何かを)見せる」という意味になります。この動詞が中動態に活用すると、「*be shown*」(ファイノマイ)になるのですが、中動態では主語が動詞によって名指される過程の場になるということでした。するとこれはどういう意味になるかというと、「私があらわれる」という意味になります。つまり英語でいう「I appear」という自動詞を使って翻訳できる意味です。

しかしそれだけではありません。「私があらわれる」は「私が見せられる」ということですから、これは受動態を使って、「I am shown」と翻訳してもいいわけです。さらに英語には再帰表現という変わった表現方法があります。それを使って、「I show myself」と翻訳することもできます。

④すなわち、ファイノマイという中動態に活用した動詞には、少なくとも、自動詞で表現・翻訳できる意味、受動態で表現・翻訳できる意味、再帰表現で表現・翻訳できる意味の三つが同居しているということです。「私があらわれる」(I appear)も「私が見せられる」(I am shown)も「私が自分自身を見せる」(I show myself)もたしかに同じ事態を表現しています。だから古代ギリシア語では、ファイノマイというひとつの動詞がこれらを担当していたわけです。

しかし、こうやって説明すると納得していただけるかもしれませんが、僕らが慣れ親しんでいる能動態と受動態の対立から改めて眺めると、この整理にどこか変なところがあることにお気づきになると思います。というのも、ファイノマイでは同居していた「I appear」と「I am shown」は、能動態と受動態の対立においては、真っ向から対立させられることになるからです。いうまでもなく、前者は能動態であり、後者は受動態です。「I appear」も「I am shown」も同じ事態を指し示しています。ところが、それらを僕らの現代の言語は鋭く対立させるのです。

ではなぜ同じ事態を指し示しているこれらふたつの表現を対立させるのでしょうか。それはおそらく、私が自分からあらわれることと、私があらわれることを強制されることを区別するためです。能動態と受動態を対立させる言語は、自発的にあらわれているのか、そうではないのか、それを何としてでもはっきりさせようとするのです。

しかし、それを厳密に区別することなどできずしようか。たとえば、僕はこの利他研究会で発表した際には、研究会のメンバーの前にあらわれた。つまり、まさしくファイノマイしました。では僕は自発的にあらわれたのだろうか、それとも強制されたのだろうか。もちろん僕はこの研究会に積極的に参加しておりますので、自発的とはいえます。しかし、やはり僕の発表の割り当てが回ってきたから発表したわけであって、純粹に自発的に発表をしたわけではない。ある意味では「この日は國分さんの発表」と言われて強制されたともいえる。要するに、自発的かどうかなど分らないのです。ところが、能動態と受動態を対立させる言語はそれを何としてでもはっきりさせようとする。どちらかに決めないとそれを言葉で表すことすらできない。ファイノマイのような言い方はないのです。「能動なのか受動なのか、どちらなんだ」と詰め寄ってくる現代の言語を僕は「尋問する言語」と呼んでいます。

尋問する言語は要するに何を問題にしているのでしょうか。自発的かどうかをはっきりさせようとするのはなぜでしょうか。僕の考えではここで問われているのが「意志」です。自分の意志でやっているのか、そうではなくて強制されているのか、それをこの言語は問題にしているのです。その意味で、能動態と受動態の対立は意志の概念と密接に関係しているのではないかと思われるわけです。

中動態の研究から僕は意志の概念に注目することとなったわけですが、意志の概念について研究しながら驚いたのは、古代ギリシアには意志の概念が存在していなかったということです。意志の概念というのはどこの社会にも当たり前のよう存在している概念と考えられているだろうと思います。しかしそうではないのです。この概念は歴史上のある時点であらわれたものなのです。

(國分功一郎『中動態から考える利他——責任と帰責性』)

【三】 次の文章【I】【II】は、天川栄人『わたしは食べるのが下手』の一節です。読んで後の問いに答えなさい。

【I】

家に連れて帰るわけにもいかないし、とりあえず近くの公園へ。

「咲子ちゃん、ごめんね」

って、葵はうるさい。あたしはベンチにどかっと腰を下ろした。いいよ別に、きにしてないよ、なんて、言っちゃんない。あたしは葵みたいに「いい子ちゃん」じゃないから。

葵はあたしの隣に座ると、唇を噛み、落ち着きなく身体を揺らした。わざわざ謝りに来たはいものの、この先どうすればいいのかわかりませんって顔。

ほんとこの子、素直だ。全部顔に出ちゃう。

葵の視線は迷いに迷って、結局、あたしのレジ袋に行きついた。そのまま、じっと見てる。やりづらいなあ。

「……食べる？」

あたしはレジ袋をガサガサやって、菓子パンを一つ、葵に渡した。ブリオッシュ生地、レモンクリームが入ったパン。上にはホワイトチョコもかかって、けっこう凝ってる。

「えっと、いいの？」

「うん」

十個食べんのも十一個食べんのも同じだから。なんて、言わないけど。あたしはコロッケパンの包みを開いた。早速がつつこうとしたけど、その前に……、

「何、どうしたの？食べられないなら食べなくていいよ」

「いや、そうじゃなくて」

葵はレモンクリームパンのパッケージをしげしげ見やりながら、

「すごい、ケーキみたい」

と言った。

「は？」

「あ、えっと」

葵は視線を泳がせ、もだもだしながら、

「うちではこういうの、食べさせてもらえないから」

「こういうのって、菓子パンのこと？」

「そ、そう。コンビニとかで売ってるパンは、添加物まみれで身体に悪いよって、お母さんが……」

…お菓子も、市販ものはほぼ食べたことない」

「うっそ。じゃ、全部手作り？」

「うん。お母さん、料理教室の先生なんだ。お菓子もよく作るから」

「へー」

そりやまた、ご立派なことだな。ママなんか、ここ数年包丁を握ったことすらなさそうだけど。

「あたしはいつもこんな感じだよ」

パパは家に帰ってこないし、ママも、夜はたいてい寝室にこもっている。

一人で寝るには広すぎる寝室で、海外ドラマなんかをだらだら流しながら、ぼうっとワインを飲んでるママは、なんだか抜け殻みたい。綺麗だけど、魂がない。

あたしはそういうママを見たくない。だから、寝室には近づかない。

夜はいつも一人。

咲子ちゃんはちゃんと食べなきゃダメだからね。適当に材料買って作って食べてね、宅配頼んでもいいからねって、ママには言われてるけど。一人で食べるのにそんなことしたくないし、だから結局いつもコンビニ飯だ。

「菓子パンに、スナック。ギトギトのお弁当。身体に悪いよお」

茶化した調子で言うけど、葵って冗談が通じない。マジな顔して、尋ねる。

「じゃあなんで食べるの？」

「（A）からに決まってるんじゃない」

答えは、意外なほどずるりと出てきた。でも、自分でも意味わかんない。意味わかんないけど、でも、本当なんでもん。

キヤベツや鶏のささみで過食できたらどんなにいいだろう。カロリーは低くて栄養のある食べ物なら、たくさん食べても罪悪感ないはず。何度もそう思った。

でもできない。「身体にいいもの」は過食できない。

詰めこみたいのは、「悪いもの」だけ。

「なんかそれじゃ、病人になりたいみたい」

葵は、そう言った。

「あー」

そうなのかもな、と思う。理由はわからないけど。

葵は、レモンクリームのパンを、はむ、とかじった。白っぽいクリームが唇の端につく。細い指先でそれをぬぐう。

ゆっくりゆっくり、葵は食べた。給食のときはほぼ箸が動かない葵だけど、今は二人きりだからそれほど緊張しないのかな。結局半分くらいは食べた。葵にしては、すごい。あたしはなんか、食べるのを忘れて、それを見てた。

「いつからなの？」

「え？」

「過食嘔吐」

葵に訊かれ、あたしはちよつと、考える。

あんまり思い出したくないけど。

「……あたし、小学校のころ、バレエやってたんだよね」

「バレエ？踊るやつ？」

「そう。ずっとバレエ教室に通ってたんだ。見てて」

あたしは立ち上がると、その場でY字バランスしてみせた。葵が拍手する。

あたしはまたベンチに座り、

「で、ある日、生徒たちだけでバ・ド・ドウのリフトのまねごとをしたのね。小学生には早いんだけどさ、見よう見まねで」

「バ・ド・ドウ？」

「男女のペアで踊ること。リフトっていうのは、男性が女性を持ち上げること」

「ああ」

こういう……って、葵が手で真似をする。そう。それ。

「そしたら、あたしを持ち上げた男子に『重っ！』って言われてさ……」

「ひどい」

葵はそう言ったけど、でもまあそれは当然のことだと思う。

リフトって、男子はいつけん軽々と持ち上げてるように見えるけど、当然、女子の体重全てを支えてるわけで。タイミングやポジションの正確さも必要だけど、そりゃ軽いに越したことはない。

「バレエって、本当に体形管理がシビアなの。大人でも、絶対に五十キロは超えるなって言われる。だけど、あたしはぐんぐん背が高くなって、体重も増えちゃって……」

そのころから、急に、体型が気になり始めた。

一応これでも、小さいころから可愛いね可愛いねって言われてきた。

でも、小学校に入ったころから、体つきががっしりしてきた気がする。

そう気づいたら、みんな本当は、あたしのことデブって思ってるんじゃないの？陰で豚って呼んでるんじゃないの？って、だんだん（B）になって。

このままじゃいけないと思って、ダイエットを始めたのが、小四の終わり。

「あたしって、実はけっこう真面目だったからさ、ダイエットにのめりこんで、どんどん痩せてったのね」

そのころはもちろん学校にも通えてたし、成績もそこそこよかった。真面目にコツコツやるっていうのが、性に合ってたんだと思う。

食べる量も減らして、運動する。それだけでスルスル体重が落ちた。頑張っただけ結果がついてくるのが嬉しくて、どんどんダイエットに熱中した。朝は抜いて、夜は納豆だけ、とか。給食だけはふつうに食べてたけど、本心では食べたくなかったし、もっとカロリー低いおかず出してよって、いつも思ってた。

フラフラすることはあったけど、「重っ」って言われたのを思い出すと、頑張れた。なのに。

「でもその年、目指してた役のオーディションに落ちて。で、やけになって、食べたいもの全部食べようって思った」

その日は珍しく、ママがレストランに連れていってくれたんだよね。ビュッフェだったから、食べ放題。「咲子ちゃん、頑張ったんだもん。ご褒美だよ」って言われて、あたし、まい上がりちゃって……。

そしたら、止まらなくなった。食べても食べても満足できなくて。これまであんなに我慢してきたんだから、もっと食べたい、もっと、もっとって。家に帰って、怖くなって、吐いた。それが始まり。

「吐けばいいんじゃないかって、そのときは、大発見したくらいのもりだったんだよね。食べても、吐けばチャラになる。食べながら痩せられる。最高じゃん！って……」

で、それが癖になって。そのうち歯止めが利かなくなった。ストレス発散のためにむちゃ食いして。後で怖くなって吐いて。

それがストレスになって、またむちゃ食いをして……。

今となってはこのありさま。結局、バレエを辞めちゃったし、学校にもろくに行けてないし。ほんと、かつこ悪い。

「食べたくないのに、食べちゃうの。だから吐く。わかんないよね」

わかるよって、安い共感される前に、拒絶する。共感されたいわけじゃないから。

ただあたしは抜け出したい。ここから。でもどこかで、一生抜け出したいと思ってる自分もいる。

食べるのは気持ち悪いけど気持ちいい。吐くのも、気持ち悪いけど、気持ちいい。

生きてるって感じがする。(注1)カシオオしてる間だけは、忘れられるから。感じたくない何かを。葵は、何も言わず、じつと黙って、耳を傾けてくれている。

「飲みこんだものはさ、ほっとくと身体が消化しちゃうでしょ。嫌なの、あたし、それ。だからその前に、全部吐き出すの」

① ああ、あたし、なんでこんなこと、この子に話してるんだろ。

今まで誰にも打ち明けられなかったのに。

葵は何度か口を開いては閉じて、ずいぶん長いこと視線をうろろさせた後、言った。

「……そんなことしなくても、咲子ちゃんは綺麗だよ」

わかっている。葵は本気で言ってるんだって。でもそれをまっすぐ受け取れない自分が情けない。きつと嘘だ、お世辞だ、おべっかだ、本心ではブス、デブって思ってるんだ……って。そんなの妄想なのに。わかっているのに。やめられない。

あたし、いつまでこんな続けないといけないんだろう。いつになったらマシな人間になれるんだろう。

ああ、まずい。心のバランスが崩れて、ネガティブ方向に傾くのを感ずる。

坂道を転がり落ちるみたいに、ダメな方に流れていく。

「あたしなんかダメダメだよ。まともに見えるかもしれないけど、メンタル超不安定だし。すぐかんしゃく起こすし」

小学校時代の友達も、離れていっちゃった。変わらなきゃいけないって、わかってるけど、同じだけの強さで、変わらない。あたしはずっとこのままだって、思ってしまう。

あたしはずっと過食しなきゃいけないんだって。吐かなきゃいけないんだって。この暗闇から抜け出すのは、ほとんど不可能みたいに思える。

「ほんとダメ人間だよね」

気分がズーンと塞いできて、言葉が尖る。

自分を傷つけるだけだって、知ってるのに。

「あたしなんかどうせ、ブスだしデブだし」

「咲子ちゃん」

葵は少し強めに咎めた。

あたしは視線をひざ元に落とす。パッケージを開けたままの、コロッケパン。

なんか、食べる気失せた。

さっきまで過食衝動がすごかったのに、今は別に、食べたいと思わない。

葵は人といると食べられないって言うけど。

あたしもそうかも。一人じゃないと、過食ってできない。葵は立ち上がり、空を仰いで言った。

「ねえ、私、本気でやろうと思う。給食改革」

そして振り返り、あたしを見る。

「咲子ちゃんはどうする？」

あたしは、どうすればいいんだろう？

【II】

翌日からあたしはまた学校に行くようになったけど、教室には入っていけなかった。

カシヨオはしてない。でも、朝起きられない。立ち上がるのがダルい。自分が情けなくて、許せなくて、みじめでたまらなくて。日の当たる場所にいるのがしんどい。

なんかもう、気を張ってるのがきつくなっちゃったな。穴が開いた風船みたいに、無気力。

「咲子ちゃん、大丈夫？」

昼休み、葵が心配そうにあたしを見た。

「ん」

ソファの上で体育座りをして、短く答える。葵はまだ気をつかってるような顔のまま、

「給食改革のことなんだけど」

「ん……」

葵はラマワティと目配せし合い、言った。

「ラマワティちゃんと話してね、献立、考えてみたんだ。それで今度、作ってみることにしたの」

「え？」

あたしは顔を上げた。

「作ってる、自分たちで？」

「うん。実際に作ってみないと味や手間がわからないから。この前の陸上部のお手伝いでも、マネージャーさんたちが『段取りが悪い』って注意されたでしょ」

「へえ……」

あたしは髪の毛の先を指に巻きつけながら、尋ねた。

「何作んの？」

別に興味ないけど。

すると、葵はちよつと声を明るくして、答えた。

「えっとね、私は脂っぽいのとか、食べごたえのあるものが苦手だから、なるべく重くないのがいいかって。それで」

葵は用意していたお料理の本を開いて見せた。

「クラムチャウダー」

なるほどね。葵はお肉苦手だけど、魚介なら比較的あっさりしてるもんね。

「あさは鉄分豊富だし、クラムチャウダーなら、乳製品も摂れるし」

橘川先生みたいなこと言う葵。栄養価が高くないと却下されちゃうから、いろいろ調べたみた。

「私はタンドリーチキン作るよお。(注2)ハラールだし」

ラマワティはいつものニコニコ顔。葵はうなずくと、ちよつとためらいつつ、言った。

「咲子ちゃんも、一緒に何か作らない？」

「え？」

作るったって。

「だってあたし、ふだん料理とかしないし」

いつもコンビニ飯だもん。パンとかお弁当とか。

「料理、けっこう楽しいよ」

ラマワティが笑うと、目が糸みたいに細くなった。

「せっかく作るんなら、手間のかかるものに挑戦してみてもいいかもねえ」

いや、まだ作るとか言ってないんだけど。

でも、料理か。料理ね。手間のかかる料理。

たとえば……。

「親子丼」

深く考えず、口をついて出てきた言葉。

大昔に、ママが作ってくれた。まだママが毎日ご飯を作ってくれていたころ。②まだママとパパとの仲がよくて、ダイニングで三人で一緒に夕ご飯を食べていたころ。

「いいね、親子丼」

葵の顔がまぶしくて、あたしはぎゅつと唇を巻き込む。

今は、ダイニングでご飯を食べることなんてない。キッチンが寒々として、誰も座らない椅子には、埃が積もっている。そしてあたしは自分の部屋にこもり、一人で身体に悪いものを胃に詰めこみ続ける。

なんかももう、嫌だな、そういうの。疲れたな、もう。

「じゃ、うちのキッチン使えば」

あたしは、ちよつとだけ無理をして、そう言ってみた。

あのキッチンで、もう一度、ちゃんとした温かいご飯が食べられたら、何かが変わりそうな気がした。

で、土曜日の昼前。あたしたちは、近所のスーパーに集合した。

葵はまた子どもっぽいTシャツ姿。ラマワティは、カラフルなワンピースに、いつもとは違って派手な柄の(注3)ヒジヤブを巻いている。意外とおしゃれだ。

あたしは気分がローだから、今朝も起きられずに、家出るのギリギリになって、だから髪とかぼさぼさで、服も適当だし……ガラスに映った自分の情けない姿に、爆発しそうになる。ブス！デブ！って、叫び出したい気持ち。

落ち着け、落ち着け。何もかもダメにしたくないでしょ、と、なんとかこらえるけど。本当は、立ってるだけでも限界寸前だ。今ほんと、ギリギリ。

「じゃ、買い出ししますか」

そんなあたしの内心も知らず、葵が買い物かごを手にした。

だけど、そこでハツとして、

「あ、ラマワティちゃん、このスーパーで大丈夫？ハラールのお肉買えるところの方がよかったですね」

あ、そっか。考えてなかった。

イスラム教では豚肉が禁止されてるけど、牛肉や鶏肉も、なんか処理の方法？が決まってる、その方法を守っていない肉は、食べられないはず。

でもラマワティは、手をパタパタやった。

「あー、うちはそこまでは気にしてないから、豚肉じゃなきや大丈夫」

「そうなんだ」

「ほんとダメなんだけど。内緒ね」

「あ、でも、業務スーパーはハラール食品の品揃えがいいよ。これ豆知識ね」

「あんまり気にしなくていいよお。食べたくないものは食べないから。それに、魚とか野菜とかは全部ハラールだし」

「あ、でも、業務スーパーはハラール食品の品揃えがいいよ。これ豆知識ね」

「へえ。知らなかった」

「あ、でも、業務スーパーはハラール食品の品揃えがいいよ。これ豆知識ね」

「いらつしやいませ。いらつしやいませ。本日はご来店まことにありがとうございます」

「精肉コーナーより、お買い得商品のご案内です」

「本日は広告の品といたしまして、国産鶏もも肉……」

「どうぞ店内ごゆっくりとお買い物をお楽しみくださいませ」

「どうぞ店内ごゆっくりとお買い物をお楽しみくださいませ」

「……あ」

「……あ」

「……あ」

「……あ」

「……あ」

「……あ」

「……あ」

「……あ」

「……あ」

「……あ」

「……あ」

「……あ」

「……あ」

「……あ」

「……あ」

「……あ」

「……あ」

「……あ」

「……あ」

「……あ」

「……あ」

「……あ」

「……あ」

「……あ」

「……あ」

ああ、あたし、葵のこと弱虫だと思ってたのに。子どもっぽくて世間知らずのダメな子だっと思ってたのに。いつの間にか、あたしの方が、引っ張られていた。

「あれっ？」

スーパーを出たところで、意外なやつに遭遇した。

「コッペ！」

てるてるのTシャツに、穴の空いたジーパン。後頭部の髪が跳ねている。

「何してんの、三人で？」

コッペが尋ねると、葵が答えた。

「ちよっとね。コッペくんは？」

「図書館行ってきた帰り……おい、修平、やめろよ」

よく見ると、コッペは五歳くらいの男の子と一緒にだった。弟かな。コッペの右足にすがりついてる。機嫌が悪そうだ。

「兄ちゃん、お腹空いた」

「グズグズ言うなよ。家帰ったらおいなりさんあるから」

「お腹空いたあ！」

修平くんは駄々をこね始める。

「あ、えっと、そのスーパーで何か買ってくる？お菓子とか……」

ラマワティが気を利かせて言うけど、コッペは断る。

「いや、いいよ。おれ、金持ってねえし」

あたしはなんの気なしに、言った。

「奢ろうか」

すると、コッペはガラス玉みたいな目であたしを見た。

そして、怒ってるような声で、きっぱりと。

「施しなら要らない」

「は？」

何言っただ、こいつ。施しなんて、大げさな。そう思ったら。

「うおっ」

突然、修平くんが、あたしの手を握った。

「あのね、兄ちゃん、けちなんだよお。この前も、アイス買ってくれなかったの」

なんて、舌つたらずな喋り方で言いながら、あたしの手をぶんぶん振り回す。

「咲子、気に入られたみたいだねえ」

「ほんと」

「あーもう。こいつ、年上のお姉さんが大好きなんだよ。困ったな」

コッペは頭をガシャガシャやると、修平くんの前でしゃがみこんだ。

「おい、修平。わがまま言うな。帰るぞ」

修平くんはイヤイヤと首を振る。

あーもう。面倒くさいな。

仕方ないから、あたしは修平くんの手を握り返した。

「一緒に帰ってあげようか？」

コッペの家は、スーパールの近くの、古そうなアパートの二階だった。

訂正。古そうなじやなくて、古い。ボロ。階段とかさびてるし、壁もヒビが入ってる。絵に描いたようなボロアパートだ。

「入って。お茶くらい出すから。修平、手洗えよ」

コッペが言っただけ、あたしたちを招き入れる。あたしは正直嫌々だけど、修平くんが引っ張るか

ら、仕方なく家に入った。すると。

「うわ……」

あまりに雑然とした有様に、あたしはぎよっとする。
なんか、ものが溢(あふ)れてる。不潔(ふけつ)ってわけじゃないんだけど、散らかってて、小汚(こぎた)い。ていうか狭(せま)い。そもそもが。

「あ、そっちの部屋はダメ。父ちゃん夜勤明けで寝てるから。こっち来て」
コッペはキビキビ指示を出した。

葵はコッペを追いかけながら、

「ごめんね、コッペくん。お邪魔(じやま)じゃない？」

「いいよ別に。その辺座(ま)って。それ、冷蔵(れいぞう)？いったんうちの冷蔵庫入れとこうか」

「あ、うん。ありがとう。お肉(にく)とあさりだけでいいよ」

コッペは意外(いがい)にもしっかりしている。

たぶん居間(いま)と思(おも)われる部屋(へや)。ちゃぶ台(ちゃぶだい)の周りには、服(ふく)やおもちゃが散らばっている。

ベランダまで、よくわかんない段ボール(だんぼーる)やゴミ袋(ごみぶくろ)でいっぱい。

あたしは、畳(たたみ)の綺麗(きれい)そうなところを探(たづ)ねけど、どこにも座(ま)りたいところがない。

コッペ、こんなところに住(す)んでんの？マジ？

「母ちゃん、起きてるの？」

コッペが居間(いま)の奥(おく)のふすまを軽く叩(たた)いた。すると、

「あらあら、どうしたの？」

奥(おく)の部屋(へや)から高い声(こゑ)がして、ゆっくりふすまが開(あ)いた。

「あ、うちの母ちゃん」

コッペがサラッと紹介(しょうかい)する。葵(あおい)がへこへこ頭(かぶ)を下(くだ)げる。

「お邪魔(じやま)してます」

「いえいえ、ようこそ。こんにちは。汚(きた)い家でごめんなさいね。修平(しゅうへい)、こっち来(こ)なさい。お姉(あね)ちゃん困(こ)ってるでしょ」

コッペンちのおばさんは、修平(しゅうへい)くんを抱(だ)き寄せた。

あたしはおばさんをまじまじと見る。

すっぴんの顔(かほ)は、しわとシミだらけ。髪(かみ)はぼさぼさ。

コッペも修平(しゅうへい)くんもがりがりなのに、おばさんはふっくらしている。ふっくらっていうか、でっぷり。オーバーサイズのワンピースを着(き)てるから、ますます太(ふ)って見える。

恥ず(は)かしくないのかな。

④条件(じょうけん)反射(へいしゃ)で、そんなことを考える。ああ、もうこんなの嫌(きら)なのに。自己(じこ)嫌(きら)悪(あく)しながら、それでも目が離(はな)せなくて、じろじろ見(み)ていると。

「触(さわ)る？」

おばさんが、いきなりそんなことを言った。

は？何(なに)言(い)ってんの。答(こた)える間(ま)もなく、おばさんはあたしの手(て)を取(と)った。
何(なに)。嘘(うそ)でしょ。

「や、やだ」

だけどおばさんはあたしの手(て)を離(はな)さずに、そのまま、自分(おれ)のお腹(おなか)の上に置(お)いた。
ワンピースの下の、ふくよかなお腹(おなか)。あたしが一番(いちばん)恐(おそ)れるもの。

だけど、触(さわ)れてみると。

それは、ぶよぶよの贅(ぜい)肉(にく)……ではなかった。

「……え」

あたしは顔(かほ)を上げた。

「赤(あか)ちゃん？」

ふやけた声(こゑ)が出(で)た。

おばさんはにっこり笑(わ)い、うなずく。

手のひらに、じんわりした熱(あつ)と、ときおりうごめくものを感じる。

「！」

ぞわって鳥肌(とりはだ)が立ったのは、嫌(きら)だったからじゃない。そうじゃなくて、……何かシンセイなも

のに触れた気がしたから。
指先から流れこんでくる、なんかよくわかんないけど、神々しいもの。

命。命だ。

そう思ったとたん、あたしの心臓が、どくどく鳴り始めた。

「何、赤ちゃん動いてんの？」

コッペが尋ねる。

「今日は朝から元気なのよねえ」

そう言って笑うお婆さん。目じりに何本もしわが寄って、お世辞にも若くは見えない。だけど。

綺麗だ。

「えっ、咲子ちゃんどうしたの」

気づけば、あたしはぼろぼろ、涙を流していた。

え、なんで？

わかんない。わかんないけど。

「あらあら、どうしたの。怖かった？」

「ち、ちが……あたし……」

お婆さんがあたしの頭を撫でる。

その指先から温かくて優しいものが、あたしの中にきらきら雪崩れてきて、空っぽのお腹を満たす。

それに気づいたとき、何か強い力で引つ張られるように、あたしはいきなり、暗いトンネルを抜けていた。

世界が突然、輝き出すような。

「浩平、どうしよう。泣いちゃった」

「泣いちゃった、じゃねえよ。泣かせんなよ」

「この子あんたの彼女？」

「なわけねえ」

「そう。よかった。浩平にはもったいないわ」

「どういふことだよ」

あたしはしやくり上げながら、これだけ言った。言わなきゃいけないと思った。

「お婆さん、綺麗」

太ってるし、しわもシミもあるし、うちのママに比べれば全然美しくないけど。

でも綺麗。綺麗だ。x生きてるって感じがする。

「あら。ありがとう」

お婆さんは謙遜もせずにとっくりそのまま受け取って、

「あなたも綺麗よ」

そして、そう返した。

「うん。咲子ちゃんは綺麗だよ」

「そうだよお。咲子はすごく綺麗だよ」

葵とラマワティも続く。今初めて、その言葉をまっすぐ受け取って、あたしは。

「……葵」

「うん」

「あたし、治りたい」

葵はちよっと驚いた顔をして、その後、ふんわりと笑った。

「そうだね」

あたしはそのまま、しばらくバカみたいにぼろぼろ泣いて、たぶん顔も超ブスだったと思うけど、でもあたしはそのとき、魂が底の方から浄化されてくような、まるで別人に生まれ変わるよ

うな、不思議な感覚を味わっていた。
あたしは、綺麗だ。
生きてるだけで、美しい。

(天川栄人『わたしは食べるのが下手』より)

(注1) カシヨオ…過食嘔吐のこと。

(注2) ハラール…イスラム法上で行って良い事や食べることが許されている食材や料理。

(注3) ヒジャブ…イスラムの女性が、頭や身体を覆う布。

問一 文章【I】について、

(1) (A) にあてはまる言葉を本文中より五字で書き抜いて答えなさい。

(2) (B) にあてはまる表現として適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 半信半疑 イ 疑心暗鬼 ウ 暗中模索 エ 明鏡止水

問二 文章【I】の傍線部①「ああ、あたしく打ち明けられなかったのに。」とありますが、ここからわかる咲子の気持ちを五十字以内で説明しなさい。

問三 文章【II】の傍線部②「まだママとパパがく食べていたところ。」とありますが、現在の咲子の家庭の状況がわかる一文を文章【I】から抜き出し、初めと終わりの四字をそれぞれ書き抜きなさい。

問四 文章【II】の傍線部③「葵はきっぱりと責めたりせずに。」とありますが、葵の咲子への対応とは対照的な対応を咲子が受けたことを表す一文を文章【I】から二十字で書き抜きなさい。

問五 文章【II】の傍線部④「条件反射でくもうこんなの嫌なのに。」とありますが、咲子のどんな様子を表していますか。文章【I】の内容を踏まえ、四十字以内で説明しなさい。

問六 文章【II】の傍線部Xに「生きてるって感じがする」とありますが、その説明として最も適切なものを選び、記号で答えなさい。

ア コッペの母親のお腹から新しい命の存在を感じ、生きる希望を持ち始めた咲子の様子。

イ コッペの母親のお腹の赤ちゃんが、新しい命として生きていることを咲子が実感した様子。

ウ コッペのお母さんのお腹に新しい命を感じ、命の尊さを理解した咲子の様子。

エ 新しい命を宿しているコッペのお母さんが自分と同じ美しさだと理解する咲子の様子。

(問題は以上です)

